

センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



浄土を思わせるほど静かできれいな海には、たくさんの悲しみが抱かれている
(岩手県宮古市 浄土ヶ浜)

写真の無断転用はご遠慮下さい。

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・講義抄録
「部落史が変わった？ ②・③・④
部落差別とは何か」
- ・教化センター研究生報告 ⑤
- ・現代社会と真宗教化 ⑥・⑦
「グリーンワークと仏事」
- ・INFORMATION ⑧

◆挟み込み(※寺報などにご利用ください)

本有の願い

東日本大震災から一年が経過した三月十一日。新聞・テレビをはじめとしたマスコミ各社は、震災を振り返る特集を組み、「忘れない」「絆」「継続的な支援」を呼びかけた。言うまでもない、多くのいのちが奪われた震災だから「忘れて」ならぬのでない。決して人の命を数で量ってはならない、死に逝った尊き一人のいのちに掌を合わす。そのとき、未だ生きる望みも見いだせず、深い悲しみにうちひしがれている人のいることが同心同時に憶いおこされてくるのである。私一人では決して気づくことの叶わない、われら本有の願いは、きつと深い悲嘆と共にあるはずだから。

二本松市の市民放射能測定室によって発見された、粉ミルクに放射性物質が混入していたニュースを耳にして、「公害の被害者は二度殺される」という言葉を思い出した。ヒ素ミルク中毒事件の被害者であった高校時代の恩師から聞いた言葉だ。師は、生後七ヶ月の我が子に、猛毒のヒ素入りミルクを自らの手で飲ませた、その深い悲しみを私たちに語ってくれた。一度目の死は、言うまでもなく実質的な被害。そして二

*

いつ終わるとも知れない深い悲しみの中で、身を寄り添わせることは容易なことでない。終わりの見えないなか、「絆」を語り「継続的な支援」を呼びかける。絆とは、愛憎を内にふくんだ葛藤でもある。忘却している私が全身を耳にして、亡き人の声なき声に耳を傾けていく。すると不思議にも死の事実の前に、愛憎し葛藤する身を晒すことによって、真実が頭になってくる。愛憎という矛盾をかかえたまま、どうすることもできない、この身の事実が頭がさがるのである。

三十五年前の悲痛な声から発信される深い悲しみと共にある本有の願いが、忘却の彼方に殺し続けている私に「ナムアマダブツ」の声となって呼び覚ましてくれるのではあるまいか。

(教化センター主幹 荒山 淳)

講義抄録

2012年1月17日

部落史が変わった？部落差別とは何か

上杉 聡氏
うえすぎ さとし
 (大阪市立大学人権問題研究センター特別研究員)

名古屋教区では、宗祖親鸞聖人の精神に則り、部落解放運動に関する基本認識を深めるとともに、人間解放に向かって自ら進んで啓発活動を行う人の誕生を願い、各組に解放運動推進要員を置いている。今回、第八期目の推進要員育成のための研修が始まったことを受け、教化センター研究生も新たな推進要員と共に学ぶこととなった。

本号では、さる一月十七日に名古屋教務所で行われた解放運動推進要員研修の第一回目の講義抄録を掲載する。近年著しく進んだ部落差別の歴史研究について、再度確認いただく一助になることを願う。

「土農工商」の本来の意味

今日は、部落問題とは何かということ
 を歴史の中から掘り起こしてみ、その
 上で部落の起源の話をさせて頂きたいと
 思っています。部落の歴史ということに
 なりますと、これまで必ず二つのことが
 語られてきました。一つは、土農工商穢
 多非人という、世の中の最底辺に部落は
 置かれているという位置づけに関する認
 識です。もう一つは、江戸時代に部落が
 生まれたとする認識です。これらが私た
 ちの聞いてきた、部落問題の図式です。

(図1)

ところが、この十年間で歴史の教科
 書は変わりました。これまで使われて
 きた「土農工商穢多非人」という言葉
 は消え、代わりに「武士と百姓、町

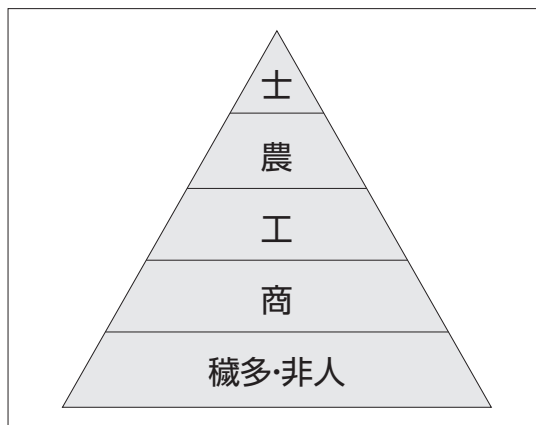


図1 使うべきでないピラミッド図式

人」となっています。(図2) また、教
 科書には「百姓、町人とは別に、穢多身分、
 非人身分などの人々がいました」と書か
 れています。ここに「別に」とあります

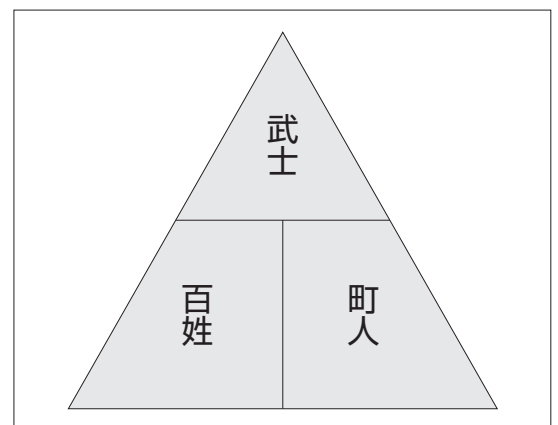


図2 江戸時代の三身分の関係

が、かつては「下に」「最底辺に」と書かれ、
 穢多身分、非人身分が他の身分と「下に」
 つながっていました。ところがそれが消
 え、「別に」となっているのです。では、
 これらはなぜ消えたのでしょうか。大き
 く二つに分けて説明したいと思います。

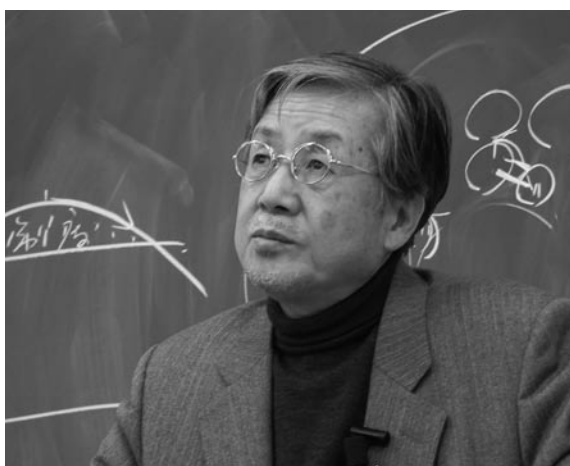
まず「土農工商」とは何であるか。こ
 の言葉は、紀元前六五〇年頃の中国の『管
 子』という書物に「土農工商の四民は、
 石民なり」と出てきます。これは四種類
 の民が国の大切な民だ、という意味です。
 つまり「土農工商」は江戸時代の日本の
 言葉ではなく、古代中国の四字熟語だっ
 たのです。

それでは土農工商とは、どういう意味
 かと言いますと、中国には皇帝がいます。
 その下に民がいます。その民を職業で分
 類したものが土農工商なのです。これは
 身分ではありませんので、ある意味で平
 等です。

その中に「士」があるので納得できな

い方もおられるかも知れませんが、「土」
 は一と十を合わせたものですね。最初か
 ら最後まで知っている人、あるいは最初
 から最後まで管理する人を言います。例
 えば、弁護士は刀を差しません。最初か
 ら最後まで法律について全体を知ってい
 る者です。つまり、「土」とは本来、何
 らかの専門的な知識、あるいはお役人的
 な立場の者を指すのであり、武士を意味
 していたわけではないのです。

また、人々を職業で四種類に分類した
 ものであるならば、「土農工商」という
 言葉で民全体をも意味しました。これと
 全く同じ使い方をしたものに、老若男女
 という言葉があります。老若男女とは、
 年齢・性別を問わず誰でも、という意味
 です。それと全く同じように、土農工商
 とは職業を問わず誰でも、という意味と
 して、かつて使われてきた言葉なのです。
 このように、職業の違いとして、もし



くは民全体という意味で使われていた「士農工商」を縦に並べて、日本の江戸時代の身分制を表そうとしても無理なものです。

「下」と「外」二種類の差別

次に、士農工商の下に穢多非人がくることについてお話しします。これまで、部落は最底辺の身分として語られてきましたが、実は歴史史料には「下」という表現が出てきません。江戸時代のものを見ても、人の外として表現されるものばかりです。

例えば、明治六年静岡県が士族にあてた文書には「かの穢多・非人の如きは、名称のごとく、四民中に齒（よわい）せしめざる者なり」（『静岡県史料』）という表現がなされていました。「齒」というのは平等に組み込まれた状態を意味します。ですから、穢多非人というのは名前のように、みんなの中に加えないものだとして書いているのです。「非人」を漢文読みしたら「人にあらず」。人間以外を意味します。下層階級を表すのなら、このようには書きません。みなさんも、例えば「下人」という言葉を文学作品などで目にしているはずですよ。つまり奴隷です。

日本の奴隷制度は卑弥呼の時代までさかのぼることができそうですが、江戸時代になると少し良くなります。江戸時代になりますと、無期限に身売りすることが禁止となり、十年以内という期間が設けら

れました。その代表的なものが、女性達を吉原などに売る、娼妓のケースです。そして、この人たちが解放される時期がやってきます。それが明治五年十月の解放令です。その当時日本にいた奴隷的な人たちは全部、この布告によって解放されました。

しかし、解放令はもう一つありました。それが、明治四年八月に出された賤民廃止令です。これは穢多非人を対象にしていました。なぜ二つの解放令を出す必要があったのでしょうか。それは賤民が二種類いたからです。二種類の賤民がいたということは、差別も二種類あったと思います。一方は人を持ち物にする、あるいは支配する差別。そして一方は除け者にする差別。（図3）

私は授業をやっている時、この二種類の差別に気が付きました。一人の学生が手を挙げて、「先生の話を聞いて、今日はよく分かった。僕は中学校の頃いじめをやりました。そのいじめが二種類ありました。一つはシカトといういじめです。無視します。もう一つがパシリです。人をこき使います」と言いました。思わず私の背中に電流が流れるのを感じました。今、子供たちがやっているいじめには二種類ある。それは非常に古い歴史の堆積物が、表面に出てきていると感じたからです。二種類のいじめを、子供たちはどこで学ぶのでしょうか。子どもたちは私達の社会の空気をどこかで吸い込んで、そして自発的に二種類のいじめをやっているのです。

こういう考え方から部落問題を排除の差別と見ますと、実に納得できることが

いっぱいあります。大阪の被差別部落の中心に渡辺村というのがあります。史料の地図には穢多村と書かれていて、湿地帯で人の住めるような所ではなく、本村から1.5キロほど隔離されています。そして穢多村の周りが青く塗られています。それが、これは堀です。つまり部落の人たちが、その周りのお百姓さんと接触をしないように、堀によって隔離されていたわけですよ。

さて、このように隔離されている部落の人たちも、仕事の関係などで一般の町の中に入る場合があります。どうするかというと、家に入る場合は門の外、玄関の外で草履を脱がなければいけませんで

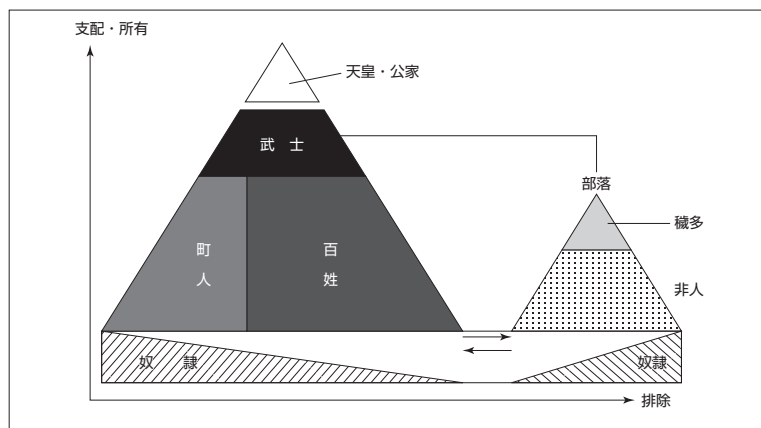


図3 新しい身分図式（部落内部のあり方は関東の場合）

した。しかも、土間までしか入れません。もし、部落の人が上り口や廊下にながれば逮捕されました。腰掛けてもいけません。なぜかというと、部落の人が腰掛けると、穢れがその家へ移ると考えられていたからです。お茶や食事を一緒にすることも、人に穢れが移る行為とされていました。

穢れとは何か？

先ほど非人が人間以外だということを申しあげましたが、実はこの穢れが深く関係しています。では「穢れ」とは何でしょうか。よく似た言葉に「汚れ」があります。この汚れと穢れは非常によく似ていて、メアリー・ダグラスという社会人類学者は、これらはいずれも秩序に反するものだと言っております。この考えに沿って、穢れと汚れの説明をしたいと思っています。

例えば、黒板は文字などを書いて、みなさんに説明するために置かれています。だから、黒板に文字を書いて説明しますと、少々字が下手であったとしても、秩序にあっている。したがって綺麗なものとなります。ところが、ここに意味のない線や絵を書いたら文字が書けません。つまりこの黒板の機能を害しているわけです。このように秩序に反しているものが汚れです。自身の一部である髪の毛や皮膚も、体の秩序の中にある時は綺麗です。しかし体から離れると、垢やゴミなどの「汚れ」となるのです。これ

ら全ての「汚れ」が秩序と関係しているのです。

そして穢れとは、この汚れが人間世界に拡大したものです。人が生きているということは、必ず秩序の中に生きています。誰かが亡くなると、まず物体としての汚れが発生します。人は腐っていきますね。そしてもう一つ、人がいなくなるることによって秩序が壊れるのです。そのことに対する汚れ感覚を、かつての人は「穢れ」として持っていたのです。

例えば、我々は人と接触をする時、嫌な人、つまり人間関係が壊れた人と関わると汚れを感じます。それがよく現れるのが握手の時です。嫌な人と握手をした後で、その手をズボンなどにこすりつけたりする。この時に感じる汚れが穢れなのです。

我々は人間関係が壊れた時、こういう不潔感を持ちます。例えば、人間関係を壊す人のことを我々は汚いといいます。「塩撒いとけ」と言うのは、そこに汚れを感じるからです。また、お葬式は、この秩序を回復させようという作用なのです。「生前、おたくのことは故人から聞いておりました。以後よろしくお願いします」といった秩序を回復させようといいます。しかし葬式の時にはまだ秩序は回復の途上にありますから、そこで塩が出るわけです。

このように、穢れとは、人間関係の秩序の壊れを意味していると考えられます。穢多という言葉はまさにその言葉から分かるように、この穢れが多いということです。人間の中のゴミということなのです。しかもこの穢れは、同じ場所に

座つたり、一緒に食事をするに移ります。この穢れは排除の差別に現れてくるのです。部落は社会の外に置かれる排除の差別、奴隷は下に置くという所有の差別と考えられます。

部落の起源

「穢多」という言葉が載っている最も古い資料に『塵袋』（一二七四～一二八一年頃）という文献があります。鎌倉時代のもので、そこに「人マシロヒモセ又オナシサモノ」と書いてありますが、漢字に直して読みますと、「人に交わることのない」ということを意味します。つまり部落差別を表す表現が、鎌倉時代の中期に出てきており、しかもその人達が「穢多」や「非人」と呼ばれているわけです。この頃、部落が無かったと言えるでしょうか。また、同じく鎌倉時代の史料で、非人の村の分布（統計約5000人）を示すものがあります。

ただ不思議なことに、非人の村は京都、奈良の周辺にのみ存在し、他の地域には存在しないのです。研究を進めて分かったのは、実は部落は荘園と対になっているということです。一つの荘園に一つの部落。そうすると、これは荘園があった頃、その本部があった京都・奈良から各地にある荘園に部落が配置されたと考えなければ説明できません。荘園は平安時代の中期に生まれ、戦国時代の初めに消えました。つまり、江戸時代ではなく、戦国時代までに部落が出来ていないと部



落と荘園の対応関係の事実と合わないのです。

これまでの教科書には、部落の起源は江戸時代として書かれてきました。しかし、そうではなかったのです。このことを言えば、これまで部落問題を教えてきた学校現場を混乱させてしまうのではなにか、という指摘も頂きました。しかし、部落がどうやって生まれ、どういう経過を辿って今があるのか。それが分かれば、今後どうやって無くしていくのかという方法も出てくるはずなのです。

例えば、室町時代末期の『鹿苑日録』（一四八九年）という文献に、日本一の庭師として称えられる者が出てきます。彼らは「河原者」と呼ばれ、多くの有名

な庭を造りました。その代表作が例えば苔寺や、銀閣寺の庭園、世界遺産である龍安寺の石庭などです。そして、この「河原者」の別名が「穢多」でした。歴史史料にも書かれています。が「河原者」と「穢多」は、同じ意味、同じ人を指します。

今、多くの先生方が龍安寺の石庭を取り上げた教科書を使っておられます。なぜかという、これまで学校で部落差別問題の授業をする、部落出身の子供たちが下を向くと言います。惨めな差別の話ですから。ところがこれは世界遺産を作ったのが穢多だという話です。すると、先祖を誇りに思い、子供たちは顔をあげると言うのです。そして部落の子供たちをいじめていた子も、差別はやっばりいかなと考える始まる。そういう教材になるのです。そういった点も含めて、これまで言われてきた「土農工商穢多非人」の間違い、そして部落の起源についても変えなければ、江戸時代以前の庭造りの話を部落問題として誇ることもできません。このようにして、教科書が大きく取り上げ方を変えるようになりました。それは単なる知識上の変更に留まらないと思っています。

例えばこれまでは、いじめの対策としての学校での取り組みと、同和問題とは切り離してきました。しかしそうしてはならないのです。そして、次回は、こうした古くからの歴史的な差別に対して、親鸞聖人がどう対処していたのかをお話ししたいと思います。

（文責編集部）

教化センター研究生報告

解放運動推進要員
研修に参加して！

私は、小学生の時に転校をしたのですが、その転校先でいじめにあうということがありました。とても小さな小学校でしたので、全校生徒から総スカンにされ、友達の輪に入れてもらえないような状態が何年か続きました。友達との会話に入れなかったり、少しでも体に触れると汚いと言われたりした記憶は今でも忘れることができません。

講義の中で上杉先生が、部落差別の原因として「穢れ」の感情がある、そしてその「穢れ」の感情は秩序が壊された時に感じるのだとおっしゃいました。

小さな小学校に転入してきた私は、それまでの人間関係の秩序を壊すものであったでしょう。それが、ふとした時に表に出たのだと思います。そのいじめは、お互いの歩み寄りでいつからか無くなりました。しかし、その当時の経験からか、人間関係をうまく築けていないのではないのか、嫌われているのではないかと、ついい人の顔を気にしてしまい、なかなか感情を表に出せない自分があります。そんな自分を克服したいということが課題でもあります。

いじめと部落差別問題は「穢れ」という感情からきている同じ問題だという先生の言葉を聞いてハッとしました。私は、いじめは個人的な問題、部落差別は社会的

的差別の問題として別の問題だと考えてきました。しかし、根底では同じ問題なのだと気付かされました。

先生は、いじめや差別問題を解決するとは言わずに、私たちの中を掘り返して克服していくとおっしゃっていました。部落差別問題と私個人の問題を別のこととして考えるのではなく、自分自身の中にある問題としてとらえなくてはならないのだと思います。歴史的な差別問題が、現代の私たちの心の中の差別意識とつながっているのでしょうか。

私自身の心の問題を考え、人間関係を回復していく道を模索していくことが、部落差別問題を考えていくことになる。また部落差別の歴史を学び、その歴史を遡って考えていくことが、私の抱える課題を克服していくことにつながっていくのではないかと、今回の講義を聞いて感じました。

(第7期研究生 加藤 浄恵)

上杉先生が今回の講義で言われた「私は、〴〵秩序に反するものを〴〵を嫌い、汚いと感じる感覚を持っている」という指摘が非常に印象深かった。

例えば、髪の毛が抜けたり、唾が口から外に出た途端に、ついさっきまで体の一部であったものであるにもかかわらず「汚い」ものになる。そして、社会においては、〴〵死〴〵は秩序に反する最たるものであり、駐車場等でも「死」を連想させる「4」という数字までも避けようとする。さらには、一昔前には、〴〵出産〴〵も秩序に反するため「穢れ」とされた。つまり、私たちは「あるコミュニケーションの〴〵秩

序に反する存在〴〵を差別することで、そのコミュニケーションの〴〵多数派の秩序〴〵を守ってきた」と言えるのではないだろうか。

こういった状況は現在、私の周りでもあるように感じる。毎日のようにニュースで流れる「〇〇容疑者が逮捕された」ということも、私達の国のルールに反した人を「犯罪者」として差別化するものであろう。そして彼らを私たちの視界から排除することで安心し、ルールを破っていない私たち多数派の秩序を守っていくようにしている。又、誰かを笑い物にするようなことが起こる時には、その笑いの元となる人への差別的な心があるように思う。子供の頃等は特に容赦なく、「誰かをネタにして、その場の皆が笑って盛り上がる」という状況があったように思

う。私も〴〵ネタ〴〵にならず、〴〵笑う側〴〵になるために必死だったのが思い返される。

このように、今回この講義を受けることによって、〴〵自分の周りの差別〴〵、〴〵自分の差別心〴〵そして〴〵その差別によって安心を得ている自分〴〵ということに目を向ける機会を頂いた。これからの生活においても、これらのことに気付く為のキーワードとして、「差別すること、〴〵多数派の秩序〴〵を守っている」という言葉を忘れないようにしたいと思う。

(第7期研究生 小嶋 朋大)

書籍紹介

「これでわかった！ 部落の歴史―わたしのダイガク講座―」

上杉 聰著(解放出版社)

本書は、今回の解放運動推進要員研修の講師(上杉聰氏)が、関西大学における連続セミナーで行った講義を内容としている。部落差別史の起源から賤民廃止令まで、これまであまり語られてこなかった差別の変遷が豊富な史料とともに丁寧に載せられている。

(解放出版社 上杉聰著)と併せておすすめしたい。

(教化推進要員 飯田真宏)

また、著者自身の被差別部落での実体験をはじめ、学校のいじめ問題、平和問題などの本質にも触れられており、部落差別問題に関心の無い方にも興味深く読めるはずである。本書の続編である『これになつとく！ 部落の歴史』



グリーンフワークと仏事

近年「グリーンフケア」と呼ばれる会が全国的に催されている。「グリーンフ」とは、「悲嘆」を意味し、死別体験に伴う苦痛や環境変化などを受け入れようとする作業・はたらき（グリーンフワーク）を支援「ケア」気を配る・関心を持つ」するのが、「グリーンフケア」である。特に災害や事故・自死などにより、家族や恋人などを突然失った場合の死別体験者への支援として注目されている。

今号では、グリーンフケアを必要とする現代社会の実状と、私たちが日頃営んでいる仏事が果たす役割について考察する。

グリーンフワークとは

グリーンフワークとは、死別の悲嘆（グリーンフ）から回復していく、心と身体の作業（ワーク）であるが、その方法は人それぞれに異なる。

例えば、毎日お内仏の前に座って手を合わせる、墓参りをする、遺影に話しかける、遺品を整理する、亡き人の生前の記録を書き綴る、思い出の地を訪れる、思い出を語るなど、その方法は十人十色である。他者からすれば「なぜわざわざそんなことをするのか」「かえって辛くなるだけではないか」と思えるような事も、当事者にとっては、辛く苦しい現実を受け止め、悲しみを乗り越えていく大事な作業なのである。

人間の自然な感情である驚きや怒り、悲しみ、喜びなどは、その度合いが大きい時には、平常の心とは異なる状態になる。そういった場合深呼吸をする、誰かに話を聞いてもらおう、音楽を聴く、一人落ち着いた部屋にこもるなど、自分なりの方法で心を落ち着かせようとする。そして、時間をかけて徐々に平常心へと戻っていく。それらのいとなみと深い悲し

み（死別の悲嘆）を伴うグリーンフワークは、基本的には同じなのだろう。

しかし、人間の感情というものは、それほど単純に整理できるものでも、コントロールできるものでもない。一旦落ち着いて克服できたかのように思えても、何かのきっかけで再び元の状態に戻ることもある。行ったり来たりを繰り返しながら、少しずつ落ち着きを取り戻していくものである。

死別の悲嘆に関しては、かつては喪に服す時と場が、世間的にも認められていたのかもしれない。しかし、現在はどうだろうか。予期せぬ突然の死別であった場合には、訳のわからないまま、瞬く間に儀式が進行される。仕事も長期間休むことなど許されないため、死別を悼む間もないまま、まるで何事もなかったかのように、即座に元の生活に戻らなくてはならない。つまり、グリーンフワークの時と場がないままに、以前と同じ生活をすることを世間から求められてしまうのである。

わがちあいのつどい

このような現代において、人間の自然な感情とじっくり向き合うグリーンフワークの一つの場として「わがちあいのつどい」がある。少人数のグループに分かれて、自分の感情を思いのままに語る場である。そこでは、日頃の思いや感情を、そのまま自分の言葉で語ることが大切にされている。同じような体験や苦しみを抱える者同士のグループで、指導者も提言者もアドバイザーもない。何かしらの答えを与える会でもない。語ることと聞くことを大切にし、誰かが話している時は最後まで話を聞く。その場で聞いた内容は口外しない。苦しみや悲しみの比較をしない。話したくない時には、無理に話さなくても良い、などの約束事が決められている。この約束事によって参加者は、安心して語ること、聞くこと、その場に居ることができるのである。

およそ一時間、苦しい気持ち、悲しい気持ち、自責や後悔の念、悩みなど、内容は自由にさまざまに語られる。沈黙が



続くこともあるが、沈黙の間は心を言語化する作業として、必要かつ大切な時間でもある。

時間の経過とともに、参加者の表情がほぐれていくことや、笑みが起こることもある。はじめは苦悶の表情で自責の念を語っていた方が、安らいだ表情に変わる。平生を装いながらも支離滅裂な話をされていた方が、だんだんと落ち着いた口調に変わっていくなど、来場した時と会場を後にする時では、参加者の表情には明らかに変化が見られる。たった一時間でも、安心して語る事のできる場は、人の心、表情、生活を変えていく力を持っている。苦しい現実は何も変わらなくとも、安心して語ること、聞くことができる場があるだけで、人間は生きていくことができるのかもしれない。

ここに「わがちあいのつどい」に参加した方の言葉を紹介したい。

汗にしても、尿にしても、鼻じるにしても、自分の体から出たとたんに

「汚」になってしまふのに、涙だけは「きれい」。流せば流すほど、心が浄化されていく。不思議な話だな。
(六十代男性参加者の言葉)

世間一般には、涙を流しながら胸の内を吐露することは「泣き言」になるのかもしれない。苦しいときに「苦しい」と言うのは、わがままになるのかもしれない。しかし、韋提希夫人がそうであったように、私たちも、自分の気持ちを自分の言葉で言語化して語ることによってこそ、目覚め、生きていくことができるのではないだろうか。

日頃の自らの日常を省みると、安心して語れる誰かに、自分の思いを聞いてもらっていることが多分にあるのではないだろうか。

自死遺族の置かれている立場

自死遺族は世間からの差別や偏見、安易な励ましに苦しんでいる方が少なくない。自死で亡くなったというのを、周囲に言えずに生活している方、葬儀や法事も世間に知られないように執り行ったという方も多い。配偶者を自死で亡くした方は、家族（特に子ども）にも話すことができず、一人で孤独に苦しみを抱え込んでいることも多い。

また、悲しみだけでなく「どうして気づいてやれなかったのか（救ってやれなかったのか）」「なぜ止められなかったのか」などの自責の念も遺族には起こってくる。さらに追い打ちをかけるように、親戚をはじめ、周囲の人から批難され、責められることすらある。悲しむことも許されない、亡き人のことを考えることすら許されないような、過酷な状況の中で生活されている方も多い。「もう忘れてしまいたい」と思ってしまうほど、苦しんでいるのである。

しんでいるのである。

「わかちあいのつどい」などの会には、遺族は会場に入る寸前まで、参加しようか迷いながら足を運ばれる。知人に会ってしまふのではないかと不安、誰かの言葉に再び苦しめられるのではないかと不安、感情をコントロールできなくなってしまうのではないかと不安、さまざまな不安や恐怖すら抱きながら来場されている。

これまで周囲の人の態度や言葉にどれほど傷つけられ、苦しめられてきたかが容易に推察されるが、その苦しみは葬儀の一面面にもある。参列者の前に立ち、焼香の度に立礼することは、遺族にとっては堪え難いほどの苦しみであり、法要そのものの意味をも喪失させてしまっているのである。

「グリーフワーク」と「グリーフケア」

グリーフワークは、あくまでも個人の作業（ワーク）である。それに対して、グリーフケアはその個人の悲しみに「気を配る・関心を持つ（ケア）」ことでしかないと考ええる。世間一般では「ケア」＝「世話をする」「面倒を見る」などと理解されがちだが、グリーフケアは何かを「する人」「してもらう人」という関係ではない。「わかちあいのつどい」に関して言えば「語る人」「聞いてあげる人」ではないということである。簡単に言えば、グリーフワークの場を開くことがグリーフケアなのだ。

これまでは、御仏事がグリーフケアの場として開かれてきたのかもしれない。悲しい気持ちのままに泣き伏せる時、親類縁者から亡き人の昔話を聞く時、自らが語る時、大勢で食事をする時、声に出して念仏・勤行する時、法話を聞く時など、さまざまな場面が含まれているのが

御仏事である。すべての場面が、遺族にとつてのグリーフワークの場として、自然と成り立ってきたのではないだろうか。

今日、「わかちあいのつどい」をはじめとした、特別な場を設けてグリーフワークが行なわれる背景には、地域共同体の変化や家族形態の変化、あらゆる人間関係の変化、御仏事の形態の変化などがあると考えられる。悲しみと向き合う、悲しみを表現する、思いを語るなどの時と場、または、それが許される人間関係が開かれていないからではないだろうか。

このようなことは、昨年の東日本大震災においても同じことが感じられる。

はじめは「何かしてあげたい」という思いで現地に赴いたけれど、実際に行ってみたら「こちらこそありがとう」という思いだった」という話はいくらでも

ある。そのことがまさに、何かを「する人」「してもらう人」ではない人間関係であろう。また、被災され悲嘆されている方の中には「みんな苦しいのだから、私だけがわがままを言うわけにはいかない」と、自らの苦しみを閉ざす人も多い。

この言葉の裏には、思いのままを言葉にして語る時と場がない、身近な人には言えない、ということもあるのではないだろうか。

グリーフワークは特別なことではない。人間が本来、自然に行ういとなみなのだ。

しかし、その時と場が失われている。今において、儀式を執行し、遺族と接する機会の多い僧侶には、グリーフワークの場を開く役割が期待されている。

(研究員 前田 健雄)

書籍紹介

「いのちの問答」

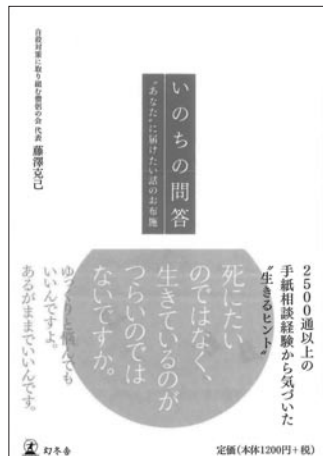
あなたに届けたい話のお布施

藤澤 克己著(幻冬舎)

超宗派で組織される「自殺対策に取り組む僧侶の会」の代表をつとめる著者が、自身の取り組みの中で気づかされたことを執筆。誰にも相談できずに一人で苦しんでいる人に届けたいという筆者の切実な願いが伝わってくる。

(研究員 前田 健雄)

仏さまの教えがやさしい言葉で綴られているので、とても読みやすい。



同会は、毎月、浄土真宗本願寺派本願寺築地別院を会場に、自死遺族のわかちあいのつどいを開催するとともに、これまで二千五百通以上もの手紙相談を行なっている。

INFORMATION

第23回平和展

「くり返された災禍をみつめて」報告

2012年3月16日(金)～23日(金)

名古屋教務所1階議事堂にて開催

さる3月16日から23日にかけて、第23回平和展が開催された。今回は「くり返された災禍をみつめて」というテーマのもと、過去においてくり返された災禍、そして現代においてくり返された災禍、この両方を徹底的に見つめることが主眼となった。

過去の災禍とは、戦時下における大谷派の積極的な戦争への加担だ。仏教の基本的な教えである「不殺生」を「一殺多生(少しを殺すことで多くが生きる)」という教えにすり替え、日清戦争に積極的に加担し、布教という形で台湾の植民地支配の一翼を担った過去。そして後の日露戦争においても、朝鮮の植民地支配に手を貸し、同じ災禍をくり返した過去。大谷派が当時、台湾および朝鮮の人々をどのように見ていたのか。展示された資料の数々は、私たちの過去の事実を冷静に物語っていた。

現代の災禍とは、被曝のことだ。終戦直前、広島および長崎における原爆投下により被曝した日本は、昨年の福島第一原子力発電所の事故により、再び被曝という災禍をくり返した。その被害は今も、福島をはじめとした多くの人々を苦しめている。その背景には、今まで原発の存在を黙認し続けてきた私たち一人ひとりの存在がある。展示された

資料は、被曝の事実をまざまざと見せつけるものばかりだった。

そして特別展として、福島第一原子力発電所の事故の発端となった東北地方太平洋沖地震における現地の写真や、瓦礫といった資料が展示された。「この瓦礫がダンボール箱で届けられた時、中を見るのが心底怖かった」と語ったスタッフの言葉は、今も忘れられない。ご来場いただいた方々は、ご覧になってどのような感想を抱かれたのだろうか。

スタッフの大東仁氏は、今回の平和展を開催するにあたり「『戦争と仏教』というものを追い続け、今回を含め23回にわたり開催されてきた平和展だが、まだまだ反省しなければならないことは山のようにある」と語った。その言葉は「事実を徹底的に見つめなければ、いつかまた同じ災禍がくり返される」という、私たち一人ひとりに対する警告のように感じられた。

(教化センター事務嘱託 寺西賢静)



教化センター日報

■2011年12月～2012年2月

12月7日 HP「お東ネット」会議

8日 自死者追悼法要「いのちの日のちの時間」後援

9日 研究生・実習「真宗門徒講座」

16日 研究生学習会

22日 研究生・聖教研修(荒山淳センター主幹)
研究業務・「平和展」学習会

2012年1月2日 研究生・教化研修「伝道スタッフ養成講座」参加

13日 研究生・実習「真宗門徒講座」

17日 HP「お東ネット」会議

研究生・教化研修「解放運動推進要員研修」参加

20日 教務所・センター職員報恩講

24日 HPお東ネット課題学習会

研究業務(真宗史)「北陸布教研究報告会」参加

30日 研究生・実習「お内仏のお給仕研修」スタッフ

2月6日 研究業務(現代社会)自死問題学習

10日 研究生・実習「真宗門徒講座」

14日 研究生・教化研修「伝道スタッフ養成講座」参加

20日 研究生・教化研修「解放運動推進要員研修」参加

21日 研究業務(近現代史)「平和展」準備

22日 HP「お東ネット」会議

28日～29日 教務所・センター職員研修「浜岡原発ほか」

お知らせ

教化センターの人事がありましたのでお知らせいたします。

退職	事務員	堀田 沙紀	(2012年1月20日付)
	事務員	小笠原智秀	(2012年1月20日付)
任命	研究員	小笠原智秀	(2012年2月1日～2012年6月30日)
	事務嘱託	寺西 賢静	(2012年2月1日～2012年6月30日)
	業務嘱託	大東 仁	(2012年2月1日～2012年3月31日)

《編集子雑感》

3年にわたり教化センターを支えてくれた仲間が出産のため退職した。彼女のきめ細かい校正にはいつも脱帽していたが、全力をあげて追いつきたい。

その彼女が「無事出産した」との便りをくれた。様々な「夢」を見させられて育ってきた私たちが、私たちはこれからの子どもたちに何を見せるのだろうか。震災によって今まで隠されていた問題が顕かになってきているが、もともとおりに復興しても、問題を覆い隠すだけの復興なら次世代に申し訳がたたない。今が正念場のはずなのだが…。

(K)

公開講座にご参加ください (*両講座とも聴講無料)

◆教化研修「真宗儀式の教相」※僧籍者対象

講師	竹橋 太氏 (本廟部出仕)	期 日	2012年4月6日(金)
時間	午後4時30分～6時	会 場	名古屋教務所1階 議事堂

◆聖教研修「『正信念佛偈』に学ぶ」※どなたでもどうぞ

講師	荒山 淳 (教化センター主幹)	会 場	名古屋教務所1階 議事堂
期 日	2012年4月27日(金)～源空章一・5月11日(金)～結勸一		
時 間	午後4時30分～6時	テキスト	『正信偈』(東本願寺出版部刊)

■教化センター

〈開 館〉

月～金曜日 10:00～21:00

土曜日 10:00～13:00

(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉

書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

寺報イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。

